城山山麓の墓所（三）

――先人の跡をしのぶ――

山本　保
（会員・佐伯市池船）

一　高妻芳洲の墓

龍鼎（てい）山養賢禅寺より少し離れた、佐伯鶴城高校第二グランド近くの山すそに、高妻芳洲の墓がある。

その墓石には、（正面）

芳洲院終誉龍華居士

華養院芳誉貞洲大姉

と、夫人の法名と一緒に彫込まれている。

墓碑の銘文は、秋月橘門・新太郎父子によって「文章ヲ為シテ簡厳法アリ。又詩ヲ善クシテ集各若干巻アリ。是ヨリ先、子玉ハ君（少年高妻廉平）ノ才器卓越ナルヲ知リテ、之ヲ公（第十代藩主毛利高翰）ニ言フ。・・・文久元年没、享年五十一歳」などと書かれている。

それは、墓碑の左側面・背面・右側面の順に、三面にわたって、謹直な楷書である。

そこには、寛龍公（第八代藩主毛利高標・佐伯文庫並びに四教堂創設者）が好学の殿様で、松下筑陰先生を招聘したこと、成徳公（第十代藩主毛利高翰・佐伯文庫の一部を徳川幕府へ献上）が中島子玉を抜てきしたこと、中島子玉の推薦で高妻芳洲が遊学し、ついに四教堂教授に就任した等々の四教堂松下筑陰――中島子玉――高妻芳洲――秋月橘門――秋月新太郎の流れが、端的に描かれている。また芳洲の業績も精彩に表現されていて、興味深いものがある。

少年時代、藩校四教堂教授・中島子玉の教えを受け、更に日出藩（木下侯・二万五千石）帆足萬里に学んで、頭角をあらわし、門下第一の秀才とうたわれた。

弘化元年（一八四四）四教堂教授に就任した。

中島子玉の死後、佐伯藩の教育は沈滞ぎみだったので第十一代藩主毛利高泰に進言し、日田から秋月橘門（広

瀬淡窓門下生）を迎えて刷新を図った。そのため藩の教育レベルは、一段と向上した。

後年、芳洲が恩師帆足萬里先生に佐伯名産猪肉を贈ったところ、丁重な礼状が届いた。愛弟子の健康を心配しながら、養生の道をこまごまと諭された添え書きもあって、深い師弟の交流をじゅうぶんにうかがい知ることができる。

なお萬里先生の書簡は、現在、城下西町高妻家に保存されている。

高妻家系図概要

①士直――②友直――③弘道――④道直――以下略

（芳洲）　（善道）　└直道（片岡家へ）

養賢寺本堂の前にある「故葛飾県知事秋月橘門先生之碑」の碑文は、2代目高妻友直が書者であり、そこに高妻家と秋月家との強い結びつきを推測することが出来る。

3代目高妻弘道は郡視学、佐伯小学校長を歴任した教育界の第一人者であり、その弟直道は片岡家の養嗣子となって、逓信省に奉職し、書道の達人であった。現在、佐伯小学校に保存されている藩校「四教堂」の大きな板額は、彼の筆跡である。兄の勤務する学校に寄贈されたのであろう。いずれにしても、貴重な文化財である。

4代目高妻道直は、市内大手前郵便局長であった。

二　秋月橘門顕彰碑

四教堂教授松下筑陰、明石秋室の墓へ通ずる道を右折して、山へ登って行くと丘があり、そこに秋月家一族の墓地がある。城山の一角、松崎の鼻（お地蔵さん）の頂上にあたる。

そこには、橘門の両親と子女の墓（数基）が、訪れる人もなく、ひっそりと立っている。中央の大きな、苔むした石碑は、日向の国（高鍋藩・二万七千石）から迎えて、孝養を尽した厳父の墓である。――逍遥府君墓――

その正面文字は橘門自身の筆蹟であり、父への追悼文が、親友高妻芳洲によって書かれている。

橘門の墓は佐伯にはなく、東京都文京区駒込の寺院内にあるが、佐伯藩校四教堂時代、彼の学識に傾倒し、また薫陶をうけた多くの弟子たちが、相談して顕彰碑を養賢寺裏山の松雨台に建立して、その徳を称えた。

（正面文字）

故葛飾県知事・秋月橘門先生碑

墓碑の左側・背・右側の順に、三面にまたがって、門人中島損（固一郎・有名な漢学者）謹誌、高妻友直（芳洲次男）謹書の碑文が、丹念に彫りこまれている。

「其ノ子弟ニ教フル諄々トシテ法有リ。少過モ亦寛假セズ。衆皆畏愛ス。・・・父母ニ事ヘテハ孝、家ヲ治ムルコト厳粛、平居ハ和易喜笑以テ晩年ヲ楽シミ・・・」

第十一代藩主毛利高泰、第十二代藩主毛利高謙の二侯に仕えたが、遠慮せずに真意を直言したので、大いに重用されたという。

明治元年、彼は新政府から三河県知事（愛知県内）に任命されたが、まだ赴任しないうちに鎮守府弁事へ、さらに同年十二月葛飾県知事（千葉県内）へと三転した。知事として民力を涵養し、業績をあげた。

明治三年退職以後、東京に住み知名の士と交流しながら、悠々自適の生活を送ったが、同十三年病没、ときに七十二歳であった。

翌年、佐伯村長古賀直衛などの門人が中心となって、多額の浄財を集めて顕彰碑を建てた。記録によると、収入五十一円、支出二十六円七十五銭、費用の内訳は墓石六円、石工十六円九十六銭そして霊屋三円二十銭、人夫六十銭（四人）、完工は明治十八年であった。

この碑は、始め松雨台（御尊父・御母堂・橘門夫人など眠っている秋月家墓地）にあって、霊屋内に安置されていたが、その後、養賢寺本堂横に移動し、終戦後は墓地整理などの都合上、現在地に移転して、霊屋のないまま、静かなたたずまいを見せている。そこには、藩校四教堂の流れが、脈々と波打っているようだ。

橘門の嗣子・秋月新太郎は、咸宜園で広瀬青邨及び広瀬林外に師事して、後年東京女子高等師範学校長、貴族院議員を歴任した。

佐伯地方には、彼による碑文が多い。（その一例）

1. 弥生町大字大坂本　「金馬橋」
　明治　三年四月　藩　助　教　水筑　新士撰書
2. 市内臼坪・岡ノ谷　「敵愾」　西南戦争墓地
　明治一九年五月　正六位勲四等　秋月新太郎撰書
3. 弥生町床木塹道北側　「新道碑」
　明治三五年六月　正五位勲三等　秋月新太郎撰書